

舞姫レポート

「鷗外は何のために舞姫を書いたか」

はじめに

私は鷗外が何故この「舞姫」書いたのかが理解できなかつた。特に感動するわけでもなく、読み終わった後、満足感を得るわけでもない。むしろ主人公に対して良くない思いを抱き、すっきりしないまま終わってしまう。

そこで、鷗外が何のためにこの「舞姫」という作品を残したのか、をテーマに考えることにした。

様々な考えが思い浮かんだが、結論として、この「舞姫」には鷗外の明治という時代を生きる人々に向けたメッセージが含まれているのだと考えた。そして鷗外はそれを伝えるためにこの舞姫を書いたのだ。

本論

まず、歴史背景について考える。この明治という時代は、「立身出世」、「国家有為」といった考え方が当たり前であり、それらの行為は人間として価値のあるものとされていて、誰もがこうした野望を抱いていた。鷗外の経歴からしても、彼も例外なくこの風潮をもろに受けていたのだろう。

同じようにその時代を生きた豊太郎は、出世・親・上司の期待に沿うことだけを考え生きてきた。そしてドイツで自由な空気に触れたことで自我に目覚め、立身出世という今までの目的を捨て、自由になりたいと望むようになった。しかし、それが原因となり、クビになり、出世の道は絶たれてしまった。

「官長はもと心のままに用あるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を懐きて、人なみならぬ面持ちしたる男をいかでか喜ぶべき。危きは余が当時の地位なりけり。」とあるように、出世・国家のために生きようとしなない人間、つまり、豊太郎のように自我に目覚め、自由を望むような人間は、いくら仕事をこなそうとも、世間から排除されてしまう。

また、せっかく何にも縛られずにエリスとの順風満帆な生活を歩んでいた豊太郎だが、相沢によって再びその道に引き戻されることになる。

縛られているものから自由になりたいと思えば排除され、自由になったと思えば再び縛られる。

それが明治という時代だったのだ。

次に、人物設定について考える。この小説の主人公、太田豊太郎は、立身出世を目指していたエリートの若者である。母のため、上司のため、豊太郎は真の自分を隠し、縛りつけ、奉公してきた。豊太郎は当時の立身出世を目指す人々を、そして母や上司、また相沢のように彼を出世の道に縛り付けているものたちは、この時代の風潮そのものを表していると考えることができる。当時の人々にとって、立身出世・国家有為などは当たり前。つまり、この「舞姫」という作品は当時の社会が描写されているのである。

結論

物語の冒頭、終盤からもわかるように、「舞姫」はハッピーエンドではない。それに、いくら出世が第一の時代であったとしても、エリスを妊娠、更には発狂までさせた豊太郎に対し批判的な感情を持つものは多いだろう。

だが、それこそが、鷗外の狙いだったのではないだろうか。

鷗外はこの「舞姫」で、この時代の典型的な生き方をしている豊太郎という人物を用いてこの時代や人々の生き方を風刺しているのだ。

立身出世のために真の自分を捨て、国のために奉公する。そんなことが当たり前の時代に、「そんな生き方で幸せになれる訳ではない。」と鷗外は皮肉っているのである。

また、一度豊太郎が自我に目覚め、エリスとの幸せな生活を送っていたことを描いたのはその前後の、つまり立身出世のために生きているときの豊太郎とを比較し、何にも縛られず自由に生きるこ

との素晴らしさを伝えるためである。

そして、読者が「豊太郎は最低だ。自分は豊太郎みたいになりたくない。」と思うことにも意味があり、鷗外は読者にこう思わせることによって、当時の人々が自分を見つめなおしてくれることを期待した。そして、自由になることが難しいこの時代が少しでも変わっていくことを望んだのだ。

以上より、これが私の考える「鷗外が舞姫を書いた理由」だ。